

昨年から今年にかけて、私は二度も史談会の研修旅行に欠席した。別に行きたくなかった訳ではなく、実は、私の立てていた個人的なスケジュールと、偶然にもかち合ったためである。

しばらく大きな仕事に追われ、昨年はほとんど机の前の生活が続き、それが、やっと十一月に終わった。その解放感が、



「久しぶりに旅でもするか」

という気持を呼び起した。

そんな

時目に

入った

のが、

熊本県

立美術

館の「

浮世展」

であった。

その後、続け

て三度美術館を回り、果ては、話題の吉野ヶ里遺跡まで足を伸すことになった。

そこで、二度の欠席のお詫びも兼ねて、私のつたない「見て歩く記」を書くことにした。

1 浮世絵 熊本県立美術館・福岡県立美術館

昨年の十一月、熊本県立美術館で、浮世絵の肉筆画の展示があった。これは、ご存じの方もあると思うが、元NHKの職員であった、今は亡き今西さんが集めたもので、氏の亡きあと、遺族の方が熊本県に寄贈されたものである。

今度一般公開されたのは、その中の整備の終わった分で、「今西コレクション名作展パート1」と銘打ってあった。

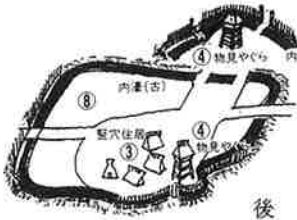
私がこの名作展に心を引かれたのは、食うものも食わず、ただもう浮世絵の収集に全精力をつぎ込んだという今西さんの執念にひかれたからである。一つのこと打ち込む。自分ができないだけに、私は強いあこがれを持っている。

私の見て歩く記

美術館と遺跡めぐり

後藤 知久

(会員・佐伯市中山区)



勸進帳

梅雨小袖書八丈

番手鷹狐城落月

その後、続け

錦繪の黄金期
歌麿・春信・清長の世界
浮世繪美人画展



●平成2年1月4日(木)~1月28日(日)
福岡県立美術館

これまで、私は浮世絵といえど版画というぐらいの知識しか持っていなかった。ところが、そうではなくて、浮世絵には肉筆画と版画の二種あることを知った。ただ浮世絵の作家には、絵を基本的に学んでいる人が少ないので、肉筆画には名作が少ないとのことである。

会場には、いろんなものを含めて百余点ものが展示されていた。系統立てて収集されたものではないので、大

体の流れにそって展示されていた。いずれも表装の方は古くなっていったが、絵の方は少しも古くささを感じさせず、色彩の鮮かさが目に残った。版画とは違って人間の生々しさが伝わってくるようで、何か生き生きしたものを感じた。

期待の歌麿のものは少なかったが、私は歌舞伎座の玄関前にある、その月のだしもの芝居絵も浮世絵の一つであることを、恥ずかしいことだが初めて知った。

戦前のことだが、まだ若いころ、初めてこの看板を見て、歌舞伎にすっかり夢中になったのを思い出す。鳥居派の流れを組む人の芝居絵と、それにそえられている勘亭流の字。この取り合わせの妙にすっかりいかれてしまい、古いプログラムなど大事に保存している。その芝居絵も何点かあった。

明けて一月、今度は福岡県立美術館で、長野県の松本市にある浮世絵保存館から借り出した浮世絵美人画展が開かれた。正月も急ぎの仕事で休まなかった私は、一寸一息とばかりに、飛び立つ思いで出掛けて行った。

こちらは逆に版画ばかりである。そのかわりはっきりと系統立てて、鈴木春信・磯田湖龍斎・鳥居清長・喜多

川歌麿・菊川英山と、当代の代表作家のものを選んで、年代順に展示してあり、その筆使いの変化とか、特徴がよくつかめて、大変いい勉強になった。

その中で、最も古い鈴木春信の作品を見ているうちに私は、戦前発刊されていた「キング」という大衆雑誌のことを思い出した。いろんな人が小説を掲載していたが時代小説では、邦枝完二や村上浪六のものが浮かんでくる。というのは、この作家達の小説のさし絵を書いていた小村雪岱という人の絵が、この春信の絵によく似ていたからである。線の細いなよなよとした姿が、

「ああ、この人は春信の流れをくむ人だな」と、思わせたのである。

同じように、戦前、東京日々新聞と大阪毎日新聞に川口松太郎が、『蛇姫様』という時代小説を連載していた。勿論、小説も面白かったが、それよりも岩田専太郎のさし絵が実にすばらしかったのを覚えている。私など、そのまま捨てるのが惜しく、毎日切取って、大事にしまっておいた。先程の小村雪岱の絵が春信の流れをくむものとすれば、こちらは正に歌麿流である。その歌麿のものに、私は一番ひかれた。何といっても線がきれいで、華

やかながいい。特に、黒を使ったものはその感が強い。春信のものは少し弱い感じを与えるし、歌麿以外の英山のもの、着物の模様など複雑になっているが、そのために線の美しさが弱くなっているような気がした。

今西さんのコレクションには、(よくもこれだけの作品を)と感心したが、版画の方は、素人なりに大変勉強になったと思っている。ここ当分は浮世絵は見なくていい程、随分多くの作品に接したが、話によれば、整理がつき次第、熊本の方では「今西コレクション名作展パート2」を開く予定とのことで、その日の来るのを今から楽しみに待っている。

2 やきもの・ぎやまん日本のうつわ展

福岡岩田屋

私は大きな都市などに出かけると、バスや電車の広告をよく見る。すると、思いがけない催しものが開かれているのを知る。一昨年、暮れ長崎に行った時は、これで「ユトリロ展」を美術館でやっていることを知った。ユトリロは私の大好きな画家の一人。観光はそこそこにと行って行った。

標題の日本のうつわ展も、熊本へ行ったついでに博多へ足を伸ばした時出会ったものである。

旅行すると、よくその土地の名のあるやきものに出会う。だが、ちょっとやさそとの値段で求められるものは少ない。結局、見て楽しむのが落ちで、やきものとは「高嶺の花」と答を出すぐらいである。

このように買う方にはあまり縁がないが、見る方にかけては案外よく見ている。例年催される「西日本工芸展」など欠かさずに見ている。



出土品とハイビジョン映像による

「藤ノ木古墳 とその時代」展

会期 平成元年11月23日(祝)→12月24日(日)
会場 福岡県立美術館

今度のうつわ展は、サントリーが創立九十周年記念にサントリー美術館が所蔵するものを、福岡の岩田屋で公開したものである。

いろんな作品が出ていた。やきものの歴史を見るように古いものから新しいものまで百二十点。この方の知識も皆無に等しいが、見る分には楽しかった。私の好みはどこか土臭さの残る暖かい感じを与えてくれるもの。無地に近く、それでいて形の面白いもの。会場では志野に一番心をひかれた。

3 藤ノ木古墳とその時代展

福岡県立美術館

絵ややきものも歴史の流れの中の一つであることは言うまでもないが、今度は、我々と同じ人間が往古どのような暮らしをしていたか！それを求めて、私は昨年十二月、再び福岡美術館を訪れた。標題の「藤ノ木古墳とその時代展」見学のためである。

ご存じのように、藤ノ木古墳の出土品が発掘されたのは、一九八六年から一九八八年にかけてである。斑鳩町の教育委員会と奈良県立橿原考古学研究所が共同で発掘

したもので、古墳は六世紀後半のもの。場所は法隆寺の西三百五十メートルの位置にあるという。

出土品展に展示されている主なものは、馬の鞍・冠・履（はきもの）・太刀、それに装身具などである。いうまでもなく中国や韓国と深い関係のあるものが多い。その幾つかは復元されていたが、青銅の薄い板に金メッキした金銅製のものが多く、私は目もくらむような美しさに圧倒された。

この出土展を見て、私は二つのことを感じた。

一つは、今から千四百年も前のものでありながら、そのデザインがシンプルで、それでいて非常にモダンな感じを与えてくれること。特に、女性の首飾りや耳輪は、現代のものよりはるかにモダンに見えた。一体、このようなデザインを誰がやったのかと、その方に気をとられた。シンプルな生活の中のシンプルなデザイン、それが生きている。

ところが、逆に儀式とか祭、あるいは馬の鞍といったようなものになると、目もくらむばかりに豪華である。そして工夫が施され、「古い昔のことだから」など言わないものがある。

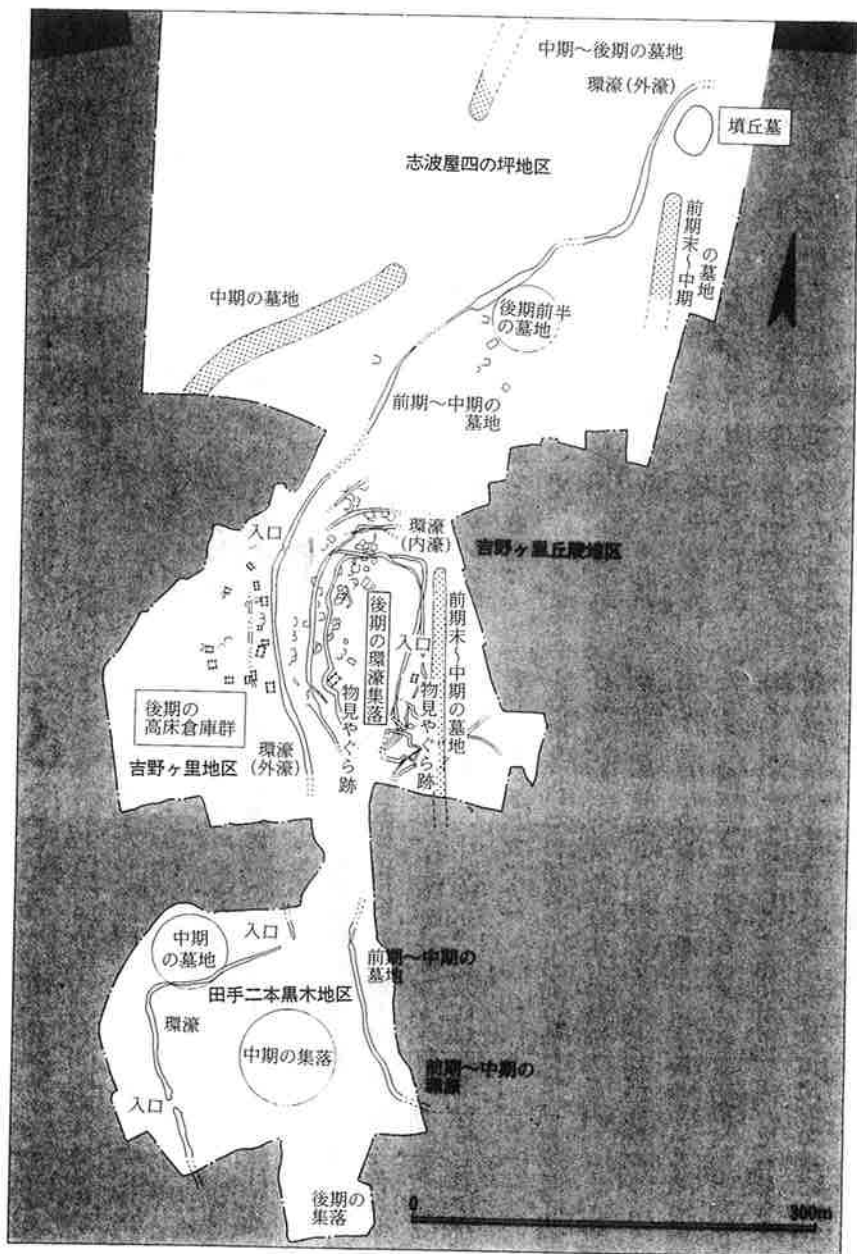
古いものを見るのはいい。単に珍しいからというだけでなく、見ているうちにいろんな夢がわいてくる。特に今度のように上流の人と思われるものには、花やかな夢を描く。

4 吉野ケ里遺跡

佐賀県三田川町

福岡の県・市立各美術館の見学を終えて、翌日、私は今評判の佐賀県三田川町の吉野ケ里遺跡迄足を伸ばした。話はそれるが、どういうものか、私が福岡へ行くと、不思議と暖かい日が続く。この日も御多分にもれず小春日和の良い天気だった。

しかし、いつの場合も、出発の前に計画を立てて出掛けるのだが、今度だけはJRの時刻表を調べても、佐賀県の地図を見ても、吉野ケ里のことは何も書いてなく、当日、朝早く博多駅の総合案内所で尋ね、いろいろ調べたうえ、週末だけに発行されている近距離向けの割引切符を利用した。博多から三田川町迄、急行と各駅停車を乗り継いで、四十分後には、もう三田川町の駅に立っていた。意外に近いのに驚いた。



佐賀県神埼郡の神崎町から三田川町にわたる南北一キ

ロ、東西四百メートルのうち、今回明かになった部分が復元されている。内濠と外濠に囲まれた弥生時代の環濠集落で、竪穴住居・物見やぐら・高床倉庫・柵などが復元され、『魏志倭人伝』と対比して説明されている。

正直の処、あまり期待はしていなかったが、実際に遺跡を目のあたりにして、古代の生活を目のあたりにしたような気がして、夢がふくらむような気がした。これまで文字の上でしか理解できなかったものが、現実のものとしてよみがえってきたような思いがした。

住居にしてもやぐらにしてもがちりと復元され、改めて当時の生活を垣間見る思いがし、私は一つ一つを丹念に見て回った。「百聞は一見にしかず」というが正にその通りである。それにしても、この吉野ヶ里遺跡は、『魏志倭人伝』に登場するどの国にあたるのだろうか。その辺の研究はこれから進められていくのだろうが、大いに期待したいものである。

参考までに書けば、遺跡への入場料も出土品の見学もいずれも無料である。何でも金の世のただけに、これには私も驚いた。

5 中華人民共和国 南京博物院名宝展 福岡市立美術館

もう一つ、歴史を学ぶ意味での資料の見学をした。

北京の故宮博物院と共に中国最大の博物院と言われる南京博物院の名宝から選ばれた、揚子江流域を中心にした中国大陸史ドラマを今日に伝える百余点の名宝。

新石器時代から六朝時代・後漢時代を経て清朝に至る二千年近い時の流れとの再会。特に、どちらかといえば軸物にはあまり興味のない私も、揚州八怪と呼ばれた諸画家の軸には、思わず足をとめて見入った。

それにしても、こうした展示を見るにつけ思うのは、わが国が如何に中国や韓国の影響を受けているかということだった。